

82年朝一期4月~6月テーマ『ピンハネ』
 6月は歴史をふり返って考えてみよう!
 夜7時より「喜望の家」集会室にて!!

夜間学校ニュース

釜ヶ崎夜間学校
 西成区茶屋二丁目十八番
 喜望の家気付
 電話 六四七-三九四六
 木曜日夜7時~9時



仕事の体験談から

その移りかわりを考えてみよう

兵隊と出稼ぎ

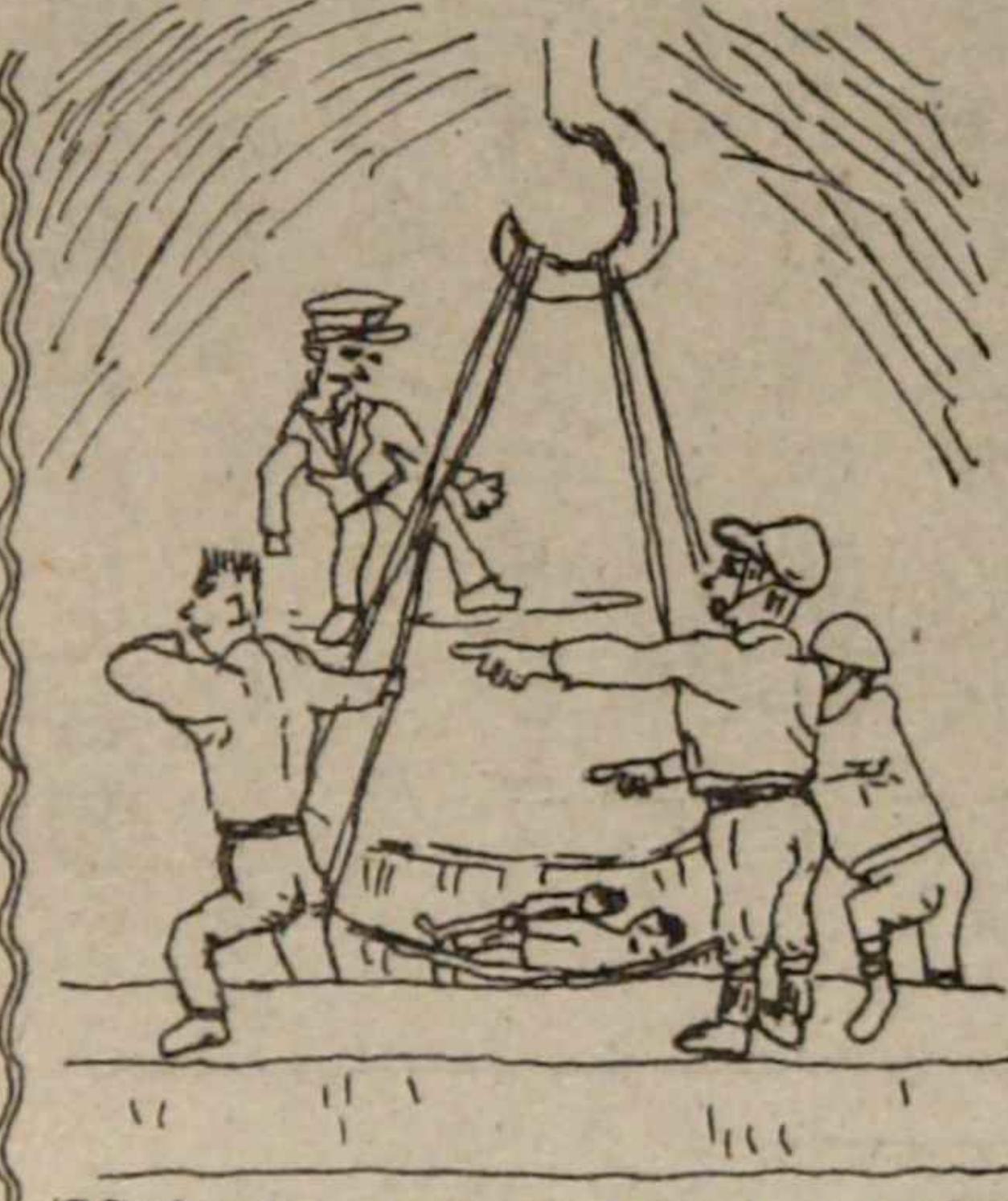
戦争といえは、うちの村で、戦死公報の入った兄嫁と弟が再婚したところ、戦後、兄が生きて帰ってきた。という話がある。とAさん。そういえば、わしが山谷におったとき、出稼ぎに来ていた男が、兄さんが死んだので、その嫁さんと再婚して跡をつぐために田舎に帰ったことがあったわ。とTさん。これを受けて再びAさん。

「二つこの話は、そんなによくあるというわけでもないが、特別なこととはだれも思っていない。ともかく、家、田畑を守らなければならぬのだから。」
 「天皇の国家から、屏主国家へ、兵隊と出稼ぎ、世の中、確に変わっているはずなのに、そうは思わせないものがある。田畑を中心とした農村の日常性は特に歴史が見えるのは。」

とを中心とした日常からは歴史とのつながりは見えにくいように思う。

釜ヶ崎を考えたも、現場に行き、働き、酒を飲み、ギャンブルをするという日常からは、歴史とのつながりは見えにくい。

兵隊と出稼ぎをとりだした場合は、そして比べて時、歴史と個人とのかわりが幾らか見えてくるように思う。



1970年4月8日天六 地下鉄工事 ガス爆発

働きの歴史は仕事で

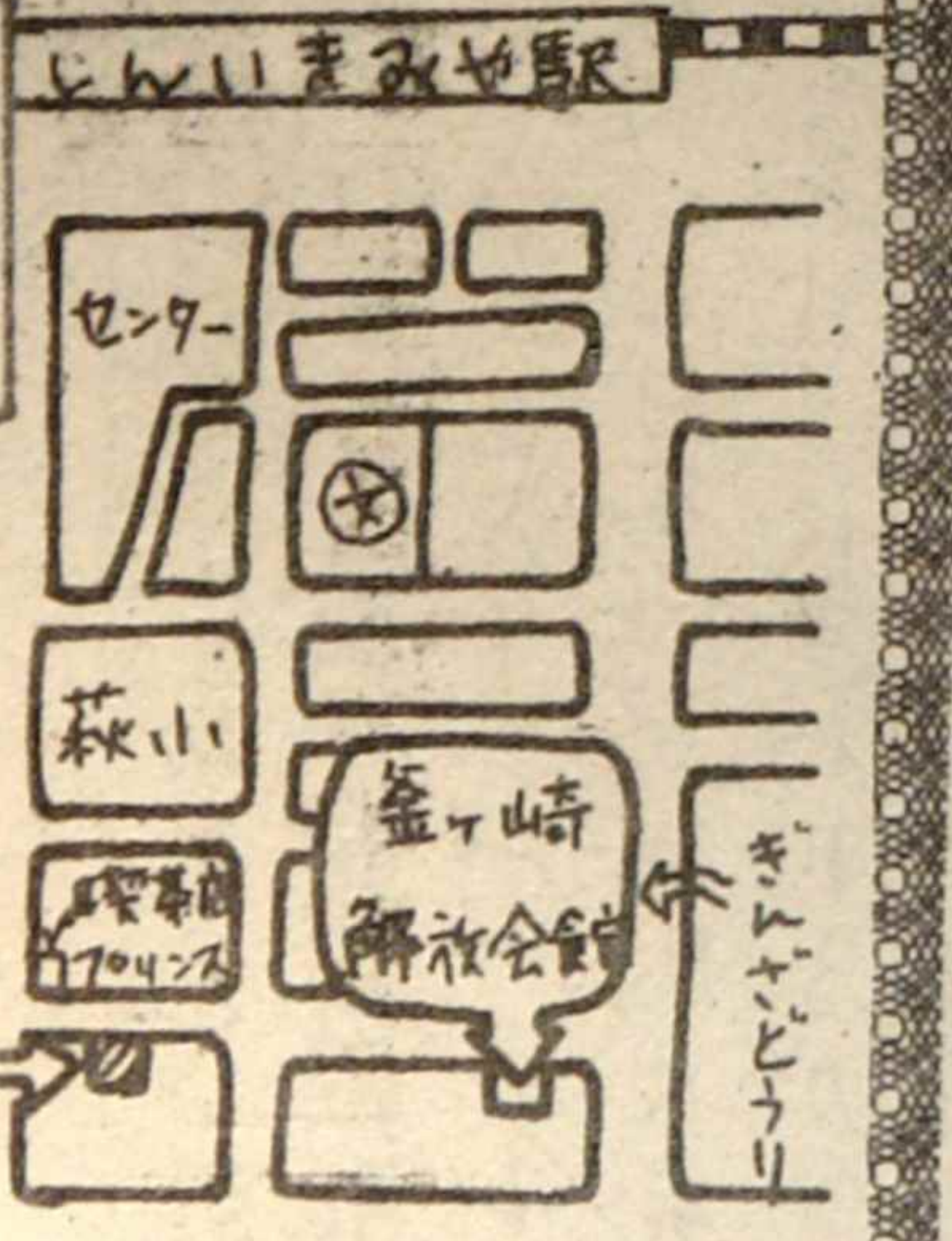
釜ヶ崎の日雇労働者である我々は、日常的に仕事に行く。あたりまえだ。そして、行く現場はよく変わる。

もう一つ、あたりまえだ。だが、このあたりまえの中に、兵隊と出稼ぎと同じくらしい意味があるのではないだろうか。

ある時期に港湾の仕事がなくなり、道路が増える。あるいは、工場内雑役が増え、ぱったりなくなる。それらの体験の中に歴史と我々のかわりが見えてくるものがあるのではないか。

お知らせ

夜間学校文集をつくらう!!
 小説・詩・俳句・短歌など、なんでも書いて下さい。



南海本線
 北
 喜望の家

II 歴史シリーズ その一夜報告 II

わしらの歴史の中心や

歴史ということばで

思いつくことは??

アンモナイトの化石 / 人間が二つ足で立った時 / ムカデ退治の伝説から小教民族の滅亡 / たたら製鉄 / 元始女は太陽であった / お茶の輸入 / ニニ六事件 / 血盟団 / シベリア抑留など、大昔の歴史以前のことから、大先輩の体験までは戦前のこと。戦後は年表ふうの……

(昭和30年) 1945
日本敗戦 (恐怖!!)
シベリア抑留

(25) 50
朝鮮動乱 (特需景気)

(530) 55
活動写真 (鞍馬天狗)
千ヤンバラ映画 (旗本退屈男)

(東宝・東映大映 自活・松竹社)

(534) 59
テレビブーム
皇太子結婚・七色夜面

(535) 60
安保斗争

敬告は学生となぐる。
今も金の警官は労働者となぐる。ナメシ
池田内閣所得倍増
(貧乏人は妻を食え)
釜ヶ崎暴動

(39) (536) 64 61
東京オリンピック

鉄腕アトム (テレビがこの頃でマンガはふるい)

(544) (43) 69 68
東大入試中止

わしはこのため東大に入れんや? たんや?!

(545) 70
万国博、アニコの黄金時代

関東では関西の日雇は工工というてた。わし荷物の搬入の仕事行、た。組立てにも。

(548) 70
あいらんセンター建物完工
越冬この年から開始
釜ヶ崎人情の歌はあ
以後不況 (仕事少なし)

今、夜間学校に来る。
みんな個人的好みも含めて言ってるので、話をしたすと長なって今日一日かかってしまいうけ、先に進もうと声がかかるとぐらい熱中。それから、年代の暗記して苦勞した思い出がた。おもしろくないのにやらされる。それに比べ、今日話

ひとりひとりが
その中に入れば
歴史もおもしろい

しにきてきたことは、ひとりひとりがその中に入っているものでおもしろいし、興味もわいてくる。
戦争の思い出では、防空や、恐怖 (こわかった) 負けそうやと子どもながら

思っていた。家族の悲劇もあった。

戦後の歴史をみると、敗戦から立ちあがり朝鮮動乱、高度成長、オリンピック、万博、と日本は経済的に発展したように言われるが、われわれにとって戦後はどうだ、たか。どうもみんなが言っている歴史とちがうことに気づく。

昔 戦争 召集令状 戦地 銃後 戦死 復員 産業戦争 出稼 ピンハネ

(天皇の名の下) (個人の責任)

国の歴史は、われわれの歴史ではないのだ。エライさんの歴史では、民衆は出てこない。民衆の出てくるものをつくる必要がある。今後

今住んでいる
釜ヶ崎の歴史と
個人とのつながりを
みていこう。(つづく)